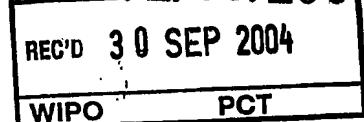


日本国特許庁  
JAPAN PATENT OFFICE

12.08.2004



別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されて  
いる事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed  
with this Office.

出願年月日  
Date of Application: 2003年 9月 9日

出願番号  
Application Number: 特願 2003-316546

[ST. 10/C]: [JP 2003-316546]

出願人  
Applicant(s): ダイセル化学工業株式会社

PRIORITY DOCUMENT  
SUBMITTED OR TRANSMITTED IN  
COMPLIANCE WITH  
RULE 17.1(a) OR (b)

2004年 9月 17日

特許長官  
Commissioner,  
Japan Patent Office

小川

洋

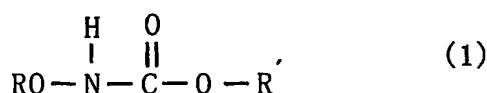
【書類名】 特許願  
【整理番号】 P03DC038  
【提出日】 平成15年 9月 9日  
【あて先】 特許庁長官殿  
【国際特許分類】 C07C273/00  
【発明者】  
【住所又は居所】 兵庫県姫路市網干区新在家 1239 ダイセル化学工業株式会社  
総合研究所内  
【氏名】 平井 成尚  
【特許出願人】  
【識別番号】 000002901  
【氏名又は名称】 ダイセル化学工業株式会社  
【代理人】  
【識別番号】 100101362  
【弁理士】  
【氏名又は名称】 後藤 幸久  
【電話番号】 06-6242-0320  
【手数料の表示】  
【予納台帳番号】 053718  
【納付金額】 21,000円  
【提出物件の目録】  
【物件名】 特許請求の範囲 1  
【物件名】 明細書 1  
【物件名】 要約書 1  
【包括委任状番号】 9800456

【書類名】特許請求の範囲

【請求項 1】

下記式(1)

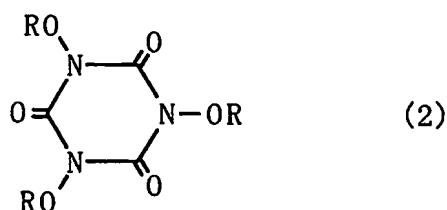
【化1】



(式中、Rはヒドロキシル基の保護基を示し、R'は炭化水素基又は隣接する酸素原子との結合部位に炭素原子を有する複素環式基を示す)

で表されるN-置換カルバミン酸エステルを加熱して、下記式(2)

【化2】



(式中、Rは前記に同じ)

で表されるN, N', N''-トリ置換イソシアヌル酸を生成させるN, N', N''-トリ置換イソシアヌル酸の製造方法。

【請求項 2】

塩基存在下で反応を行う請求項1記載のN, N', N''-トリ置換イソシアヌル酸の製造方法。

【請求項 3】

Rが置換基を有していてもよいアリールメチル基である請求項1又は2記載のN, N', N''-トリ置換イソシアヌル酸の製造方法。

【請求項 4】

R'が置換基を有していてもよい芳香族性環式基である請求項1～3の何れかの項に記載のN, N', N''-トリ置換イソシアヌル酸の製造方法。

【書類名】明細書

【発明の名称】N, N', N''-トリ置換イソシアヌル酸の製造方法

【技術分野】

【0001】

本発明は、吸着剤や種々の反応の触媒又はそれらの前駆体、樹脂類の中間体などとして有用なN, N', N''-トリ置換イソシアヌル酸の製造方法に関する。

【背景技術】

【0002】

従来、N, N', N''-トリヒドロキシイソシアヌル酸は、二酸化硫黄の吸着剤（例えば、特許文献1及び2参照）及び酸化触媒（例えば、特許文献3参照）として利用されている。

【0003】

一方、N, N', N''-トリアルキルイソシアヌル酸の製造方法としては、例えば、塩基等の存在下、加熱によりイソシアネートを3量化する方法が知られている。しかし、同様の方法でN, N', N''-トリヒドロキシイソシアヌル酸やN, N', N''-トリアルコキシイソシアヌル酸を製造しようとしても、原料となるヒドロキシイソシアネートやアルコキシイソシアネートの存在が単離されたプロダクトとして確認されていないため、上記方法をそのまま適用することはできない。

【0004】

また、ヒドロキシイソシアネート等価体として、水酸基を保護したアルコキシイソシアネートの誘導体を3量化することによりN, N', N''-トリアルコキシイソシアヌル酸を製造する方法がいくつか知られている（例えば、特許文献3及び非特許文献1～5参照）。非特許文献1には、カルボニルジイミダゾールとO-ベンジルヒドロキシリルアミンとを反応させた後、90℃に加熱することによりN, N', N''-トリス（ベンジルオキシ）イソシアヌル酸が得られることが開示されている。特許文献3にも同様の方法が開示されているが、N, N', N''-トリス（ベンジルオキシ）イソシアヌル酸の収率は19%と低い。また、N, N', N''-トリアルコキシイソシアヌル酸の製造に利用する反応として、非特許文献2にはベンゾトリアゾール、ホスゲン、及びO-ベンジルヒドロキシリルアミンを用いる反応が、非特許文献3にはホスゲンとO-アルキルヒドロキシリルアミンとを反応させトリエチルアミンで処理する方法が、非特許文献4にはメチルアジドフォルメートと光による反応が、非特許文献5はナトリウムジエチルN-アルコキシフオスフォルアミデートと二酸化炭素を用いた反応がそれぞれ開示されている。

【0005】

【特許文献1】特開平4-250819号公報

【特許文献2】特表平6-502349号公報

【特許文献3】国際公開第WO03/55600号パンフレット

【非特許文献1】Angew. Chem. 1961, 73, 657

【非特許文献2】Croat. Acta 2000, 73, 569

【非特許文献3】Canad. J. Chem. 1960, 38, 343

【非特許文献4】Tetrahedron Lett. 1968, 40, 4315

【非特許文献5】J. Org. Chem. 1965, 30, 1268

【発明の開示】

【発明が解決しようとする課題】

【0006】

しかしながら、これらの方法は、原料が複雑であったり、得られるN, N', N''-ト

リアルコキシイソシアヌル酸の収率が十分でなかつたり、反応時や後処理の操作性に劣り、必ずしも満足できるものではなかつた。

従つて、本発明の目的は、N, N', N'' - トリ置換イソシアヌル酸を簡便に高い収率で製造する方法を提供することにある。

【課題を解決するための手段】

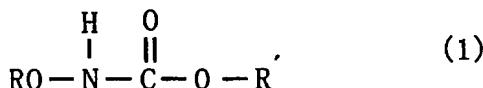
【0007】

本発明者らは、上記目的を達成するため鋭意検討した結果、原料としてN-置換カルバミン酸エステルを用いることにより、N, N', N'' - トリ置換イソシアヌル酸を高い収率で簡易に製造しうることを見いだし、本発明を完成した。

【0008】

すなわち、本発明は、下記式(1)

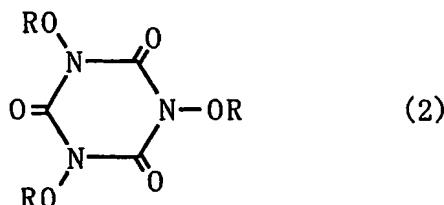
【化1】



(式中、Rはヒドロキシル基の保護基を示し、R'は炭化水素基又は隣接する酸素原子との結合部位に炭素原子を有する複素環式基を示す)

で表されるN-置換カルバミン酸エステルを加熱して、下記式(2)

【化2】



(式中、Rは前記と同じ)

で表されるN, N', N'' - トリ置換イソシアヌル酸を生成させるN, N', N'' - トリ置換イソシアヌル酸の製造方法を提供する。本発明の製造方法は、塩基存在下で反応を行つてもよい。好ましくは、前記Rは置換基を有していてもよいアリールメチル基であり、前記R'は置換基を有していてもよい芳香族性環式基である。

【0009】

なお、本明細書において、「ヒドロキシル基の保護基」には、後に脱離してヒドロキシル基を生成させる基のほか、脱離を目的としない基も含まれる。

【発明の効果】

【0010】

本発明の製造方法によれば、N, N', N'' - トリ置換イソシアヌル酸を簡便に高い収率で得ることができる。こうして得られるN, N', N'' - トリ置換イソシアヌル酸は、吸着剤や種々の反応の触媒などとして広い範囲で利用できる。

【発明を実施するための最良の形態】

【0011】

本発明では、前記式(1)で表されるN-置換カルバミン酸エステルを用いる。式(1)中、Rはヒドロキシル基の保護基を示し、R'は炭化水素基又は隣接する酸素原子との結合部位に炭素原子を有する複素環式基を示す。

【0012】

前記Rにおけるヒドロキシル基の保護基としては、有機合成の分野で慣用のヒドロキシ

ル基の保護基を用いることができる。このような保護基として、例えば、アルキル基（例えば、メチル、エチル、プロピル、イソプロピル、ブチル、*t*-ブチル基などのC<sub>1-30</sub>（好ましくはC<sub>1-20</sub>）アルキル基など）、アルケニル基（例えば、アリル基など）、シクロアルキル基（例えば、シクロヘキシル基など）、アリール基（例えば、2, 4-ジニトロフェニル、トリメチルフェニル基など）、アラルキル基（例えば、置換基を有していてもよいアリールメチル基など）などの炭素数1～30（好ましくは炭素数1～20）の炭化水素基；置換メチル基（例えば、メトキシメチル、*t*-ブロキシメチル、メチルチオメチル、ベンジルオキシメチル、2-メトキシエトキシメチル、2, 2, 2-トリクロロエトキシメチル、ビス（2-クロロエトキシ）メチル、2-（トリメチルシリル）エトキシメチル基など）、置換エチル基（例えば、1-エトキシエチル、1-メチル-1-メトキシエチル、1-イソプロポキシエチル、2, 2, 2-トリクロロエチル、2-メトキシエチル、1-[メトキシエトキシ]エチル基など）、テトラヒドロピラニル基、テトラヒドロフラニル基、1-ヒドロキシアルキル基（例えば、1-ヒドロキシエチル、1-ヒドロキシヘキシル、1-ヒドロキシデシル、1-ヒドロキシヘキサデシル、1-ヒドロキシ-1-フェニルメチル基など）等のヒドロキシル基とアセタール又はヘミアセタール基を形成可能な炭素数2～20の基などが挙げられる。

#### 【0013】

他のヒドロキシル基の保護基としては、例えば、アシル基（例えば、ホルミル、アセチル、プロピオニル、ブチリル、イソブチリル、バレリル、ピバロイル、ヘキサノイル、ヘプタノイル、オクタノイル、ノナノイル、デカノイル、ラウロイル、ミリストイル、パルミトイyl、ステアロイル基などのC<sub>1-20</sub>脂肪族アシル基等の脂肪族飽和又は不飽和アシル基；アセトアセチル基；シクロペンタンカルボニル、シクロヘキサンカルボニル基などのシクロアルカンカルボニル基等の脂環式アシル基；ベンゾイル、ナフトイル基などの芳香族アシル基など）、スルホニル基（メタンスルホニル、エタンスルホニル、トリプルオロメタンスルホニル、ベンゼンスルホニル、p-トルエンスルホニル、ナフタレンスルホニル基など）、アルコキシカルボニル基（例えば、メトキシカルボニル、エトキシカルボニル、*t*-ブロキシカルボニル基などのC<sub>1-4</sub>アルコキシカルボニル基など）、アラルキルオキシカルボニル基（例えば、ベンジルオキシカルボニル基、p-メトキシベンジルオキシカルボニル基など）、置換又は無置換カルバモイル基（例えば、カルバモイル、メチルカルバモイル、フェニルカルバモイル基など）、無機酸（硫酸、硝酸、リン酸、ホウ酸など）からOH基を除した基、ジアルキルホスフィノチオイル基（例えば、ジメチルホスフィノチオイル基など）、ジアリールホスフィノチオイル基（例えば、ジフェニルホスフィノチオイル基など）、置換シリル基（例えば、トリメチルシリル、トリエチルシリル、*t*-ブチルジメチルシリル、トリベンジルシリル、トリフェニルシリル基などのトリC<sub>1-10</sub>炭化水素基置換シリル基など）、複素環式基などが挙げられる。

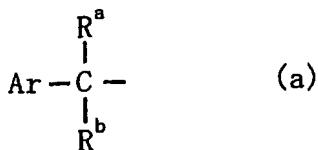
#### 【0014】

好ましいRには、例えば、炭化水素基；置換メチル基、置換エチル基、テトラヒドロピラニル基、テトラヒドロフラニル基等のヒドロキシル基とアセタール又はヘミアセタール基を形成可能な基；アシル基；アラルキルオキシカルボニル基；置換シリル基などが含まれる。なかでも、置換基を有していてもよいアリールメチル基等の炭化水素基が好ましく用いられる。

#### 【0015】

置換基を有していてもよいアリールメチル基としては、例えば、下記式(a)

## 【化3】



(式中、R<sup>a</sup>及びR<sup>b</sup>は水素原子又は炭化水素基を示し、Arはアリール基を示す)で表されるアリールメチル基が挙げられる。R<sup>a</sup>及びR<sup>b</sup>における炭化水素基としては、例えば、アルキル基(メチル、エチル、イソプロピル、t-ブチル基などのC<sub>1-4</sub>アルキル基等)、アルケニル基(ビニル、アリル基などのC<sub>1-4</sub>アルケニル基等)、アルキニル基、脂環式炭化水素基、芳香族炭化水素基(フェニル基、ナフチル基等)などが挙げられる。Arにおけるアリール基としては、フェニル、ナフチル、アントリル、フェナントリル基などの芳香族炭化水素基、ピリジン基などの芳香族性複素環式基が挙げられる。

## 【0016】

R<sup>a</sup>、R<sup>b</sup>及びArは置換基を有していてもよく、このような置換基としては、例えば、ハロゲン原子、炭化水素基(アルキル基、アリール基、シクロアルキル基等)、アルコキシ基(例えば、メトキシ基等のC<sub>1-4</sub>アルコキシ基などのアルコキシ基、フェノキシ基などのアリールオキシ基等)、カルボキシル基、置換オキシカルボニル基(メトキシカルボニル、エトキシカルボニル基などのC<sub>1-4</sub>アルコキシカルボニル基などのアルコキシカルボニル基等)、アシリル基、アシリルオキシ基(アセチルオキシ基等)、ニトロ基、ヒドロキシル基、メルカプト基、置換チオ基、置換又は無置換カルバモイル基、シアノ基、置換又は無置換アミノ基(アミノ基、N,N-ジメチルアミノ基などのN,N-ジC<sub>1-4</sub>アルキルアミノ基等)、スルホ基、複素環式基、これらが結合した基などが挙げられる。

## 【0017】

Arが有する置換基のうち少なくとも2つが互いに結合して、Arを構成する炭素原子と共に芳香族性又は非芳香族性環を形成してもよい。このような環としては、例えば5~12員の芳香族性又は非芳香族性環、特に6~10員環程度の炭化水素環(縮合炭素環、橋かけ炭素環を含む)又は複素環(縮合炭素環、橋かけ炭素環を含む)などが挙げられる。このような環は、例えば、アルキル基、ハロアルキル基、ヒドロキシル基、アルコキシ基、カルボキシル基、置換オキシカルボニル基、アシリル基、アシリルオキシ基、ニトロ基、シアノ基、アミノ基、ハロゲン原子などの置換基を有していてもよい。

## 【0018】

代表的な置換基を有していてもよいアリールメチル基としては、ベンジル；2,6-ジクロロベンジル、3-ブロモベンジルなどのハロベンジル；2-ニトロベンジルなどのニトロベンジル；ジフェニルメチル、トリフェニルメチル基などが挙げられる。好ましくは炭素数7~20程度のアリールメチル基が用いられる。

## 【0019】

前記R'における炭化水素基としては、例えば、アルキル基(メチル、エチル、イソプロピル、t-ブチル基などのC<sub>1-4</sub>アルキル基等)、アルケニル基(ビニル、アリル基などのC<sub>1-4</sub>アルケニル基等)、アルキニル基、脂環式炭化水素基(シクロヘキシル基など)、芳香族炭化水素基(フェニル、ナフチル、アントリル、フェナントリル基など)、これらが複数個結合した基(ベンジル、フェネチル基などのアラルキル基など)などの炭素数1~30(好ましくは炭素数1~20)の炭化水素基などが挙げられる。

## 【0020】

前記R'における隣接する酸素原子との結合部位に炭素原子を有する複素環式基を構成する複素環には、芳香族性複素環及び非芳香族性複素環が含まれる。このような芳香族性複素環としては、例えば、ヘテロ原子として酸素原子を含む複素環(例えば、フラン、テ

トライドロフラン、オキサゾール、イソオキサゾールなどの5員環、4-オキソ-4H-ピラン、テトライドロピラン、モルホリンなどの6員環、ベンゾフラン、イソベンゾフラン、4-オキソ-4H-クロメン、クロマン、イソクロマンなどの縮合環など)、ヘテロ原子としてイオウ原子を含む複素環(例えば、チオフェン、チアゾール、イソチアゾール、チアジアゾールなどの5員環、4-オキソ-4H-チオピランなどの6員環、ベンゾチオフェンなどの縮合環など)、ヘテロ原子として窒素原子を含む複素環(例えば、ピロール、ピロリジン、ピラゾール、イミダゾール、トリアゾールなどの5員環、ピリジン、ピリダジン、ピリミジン、ピラジン、ピペリジン、ピペラジンなどの6員環、インドール、インドリン、キノリン、アクリジン、ナフチリジン、キナゾリン、プリンなどの縮合環など)などが挙げられる。

[0 0 2 1]

これらの炭化水素基及び隣接する酸素原子との結合部位に炭素原子を有する複素環式基は、置換基を有していてもよい。置換基としては、例えば、前記式(a)におけるR<sup>a</sup>等が有していてもよい置換基と同様の基、すなわち、ハロゲン原子、炭化水素基、アルコキシ基、カルボキシル基、置換オキシカルボニル基、アシリル基、アシリルオキシ基、ニトロ基、ヒドロキシル基、メルカプト基、置換チオ基、置換又は無置換カルバモイル基、シアノ基、置換又は無置換アミノ基、スルホ基、複素環式基、これらが結合した基などが挙げられる。これらの置換基のうち少なくとも2つが互いに結合して、炭化水素基又は複素環式基を構成する原子と共に、前記Ar<sup>a</sup>が有する置換基が形成してもよい芳香族性又は非芳香族性環と同様の環を形成してもよい。

[0 0 2 2]

好ましいR'としては、加熱による-O-R'の脱離が容易であり、反応速度を促進する点で、置換基を有していてもよい芳香族炭化水素基及び置換基を有していてもよい芳香族性複素環式基、すなわち、置換基を有していてもよい芳香族性環式基が挙げられる。代表的な置換基を有していてもよい芳香族性環式基としては、フェニル、クロロフェニル、トリル、キシリル、メトキシフェニル、ニトロフェニル、ナフチル、2-フランイル、4-ピリジル基などが挙げられる。好ましくは炭素数6～20程度の芳香族性環式基が用いられる。

【0023】

前記式（1）で表されるN-置換カルバミン酸エステルは、例えば、(i) 下記式(A)で表されるハロギ酸エステル又は式(B)で表される炭酸エステル

【化4】

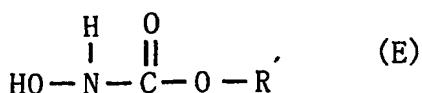


(A)

(B)

(式中、Xはハロゲン原子を示す。R'は前記に同じ)と、式:  $\text{RO}-\text{NH}_2$  (C) で表されるO-置換ヒドロキシルアミンとの反応、(ii)ジメチルカルボネート、尿素又はホスゲンと、式:  $\text{R}'\text{OH}$  (D) で表されるヒドロキシ化合物、及び式:  $\text{RO}-\text{NH}_2$  (C) で表されるO-置換ヒドロキシルアミンとの反応、(iii) 前記式(A)で表されるハロギ酸エステル又は式(B)で表される炭酸エステルとヒドロキシルアミン ( $\text{HO}-\text{NH}_2$ )との反応により生成した下記式(E)

## 【化5】



(式中、R'は前記に同じ)

で表されるカルバミン酸エステルと、式：RX (F) (式中、Xはハロゲン原子を示す) で表されるアルキルハライド又は二重結合性化合物（例えば、Rに対応するアルケン類等）との反応などを用いて製造することができる。例えば、前記(i)の反応を用いることにより、クロロギ酸フェニルなどのハロギ酸エステルとO-ベンジルヒドロキシルアミン塩酸塩とから、N-ベンジルオキシカルバミン酸フェニルなどのN-ベンジルオキシカルバミン酸エステルを生成することができる。

## 【0024】

前記(i)～(iii)の反応は、必要に応じて塩基、あるいは触媒の存在下で行われる。このような塩基としては、例えば、酢酸ナトリウム、ピリジン、ナトリウムエトキシドなどの後述の塩基として例示のものを利用できる。塩基の使用量は、反応を阻害しない範囲で適宜選択できるが、O-置換ヒドロキシルアミン又はその塩に対して、通常0～10当量、好ましくは0～5当量、より好ましくは0～2当量程度である。

## 【0025】

反応は、溶媒の存在下で行ってもよい。溶媒としては、反応に不活性なものであれば特に限定されず、後述の溶媒として例示のものを利用できる。

## 【0026】

反応温度は、例えば、-20～100℃、好ましくは0～60℃、より好ましくは0～40℃である。反応は、常圧、減圧、加圧下の何れであってもよいが、通常、常圧で行われる。反応は、回分式、半回分式、連続式などのいずれの方法により行うことができる。

## 【0027】

反応終了後、反応生成物は、必要に応じて、例えば、濾過、濃縮、蒸留、抽出、晶析、再結晶、カラムクロマトグラフィーなどの分離手段や、これらを組み合わせた分離手段により分離精製できる。

## 【0028】

上記(i)～(iii)の反応により、対応するN-置換カルバミン酸エステルが得られる。なお、本発明におけるN-置換カルバミン酸エステルは、上記製造方法に限られず、他の方法により製造されたものであってもよい。

## 【0029】

本発明の製造方法は、式(1)で表されるN-置換カルバミン酸エステルを加熱して、下記式(2)で表されるN, N', N''-トリ置換イソシアヌル酸を生成することを特徴としている。前記N-置換カルバミン酸エステルは、単離精製したものであってもよく、N-置換カルバミン酸エステルを含む反応混合物やその濃縮物等であってもよい。

## 【0030】

反応は、好ましくは塩基の存在下で行われる。塩基の添加により、上記の反応速度を向上させることができる。塩基としては、無機塩基及び有機塩基を利用でき、例えば、トリエチルアミン、4-ジメチルアミノピリジン(DMAP)、1, 8-ジアザビシクロ[5. 4. 0]-7-ウンデセン(DBU)、トリエチレンジアミン(1, 4-ジアザビシクロ[2. 2. 2]オクタン；DABCO)、1, 5-ジアザビシクロ[4. 3. 0]-5-ノネン(DBN)、ヘキサメチレンテトラミン、テトラメチルエチレンジアミン、トリオクチルアミン、ジメチルアニリン、N-メチルピロリジン、N-メチルピペリジン、4

一メチルモルフォリン等の3級アミン；ピリジン、ルチジン、ピコリン、イミダゾールなどの窒素含有芳香族性複素環化合物；水酸化ナトリウム、水酸化カリウム等のアルカリ金属の水酸化物；水酸化カルシウム、水酸化マグネシウム等のアルカリ土類金属の水酸化物；酸化マグネシウム、酸化カルシウムなどのアルカリ金属又はアルカリ土類金属の酸化物；炭酸水素カリウム、炭酸水素ナトリウム、炭酸カリウム、炭酸ナトリウム等のアルカリ金属又はアルカリ土類金属の炭酸塩類；酢酸ナトリウムや酢酸カリウム等のアルカリ金属又はアルカリ土類金属のカルボン酸塩類；ナトリウムメトキシド、カリウムメトキシド、ナトリウムエトキシド、カリウムエトキシド、t-ブロトキシナトリウム、t-ブロトキシカリウム等のアルカリ金属又はアルカリ土類金属のアルコキシド類などが挙げられる。これらの塩基は単独で又は2種以上を組み合わせて使用できる。なかでも、トリエチルアミン、4-ジメチルアミノピリジンなどの3級アミン；ルチジン、ピコリンなどの窒素含有芳香族性複素環化合物などが好ましい。

#### 【0031】

塩基の使用量は、反応を阻害しない範囲で適宜選択できるが、N-置換カルバミン酸エステルに対して、通常0～10当量（例えば、0.01～10当量）、好ましくは0～5当量（例えば、0.1～5当量）、より好ましくは0～2当量（例えば、0.5～2当量）程度である。

#### 【0032】

反応は、溶媒の存在下で行ってもよい。溶媒としては、原料に対して不活性なものであれば特に限定されず、例えば、ベンゼン、トルエン、キシレン、ニトロベンゼン、クロロベンゼンなどの置換基を有していてもよい芳香族炭化水素類；ペンタン、ヘキサン、ヘプタンなどの脂肪族炭化水素類；シクロヘキサン、メチルシクロヘキサンなどの置換基を有していてもよい脂環式炭化水素類；酢酸エチル、酢酸ブチル等のエステル類；ジエチルエーテル、ジオキサン、テトラヒドロフラン（THF）、ジフェニルエーテルなどのエーテル類；四塩化炭素、クロロホルム、塩化メチレンなどのハロゲン化炭化水素；アセトニトリル、ベンゾニトリルなどのニトリル類；N, N'-ジメチルホルムアミドなどの有機溶媒及びこれらの混合物が挙げられる。溶媒の使用量は、反応を損なわない範囲で適宜選択されるが、N-置換カルバミン酸エステル100重量部に対して、通常0～10000重量部、好ましくは0～1000重量部、より好ましくは0～300重量部程度である。

#### 【0033】

反応温度は、例えば、20～200℃、好ましくは40～160℃、より好ましくは60～140℃である。反応温度が低すぎると転化率が低下しやすく、反応温度が高すぎると生成物が分解しやすくなり、何れの場合も収率が低くなる。反応は、常圧、減圧、加圧下の何れであってもよいが、通常、常圧で行われる。反応は、回分式、半回分式、連続式などのいずれの方法により行うことができる。

#### 【0034】

上記方法により、前記式(1)で表されるN-置換カルバミン酸エステルの-O R'基が加熱によりアルコール又はフェノールとして脱離し3量化して、前記式(2)で表されるN, N', N"-トリ置換イソシアヌル酸が生成する。なお、式(2)におけるRがヒドロキシル基の保護基であるN, N', N"-トリアルコキシイソシアヌル酸は、さらに、Rにおけるヒドロキシル基の保護基を脱保護することにより、式(2)におけるRが水素原子であるN, N', N"-トリヒドロキシイソシアヌル酸へ変換することができる。具体的には、例えば、N, N', N"-トリス(ベンジルオキシ)イソシアヌル酸にパラジウム触媒などの水素化分解触媒と水素とを作用させることにより、N, N', N"-トリヒドロキシイソシアヌル酸を生成できる。また、Rがアルキル基、置換メチル基、置換エチル基、アシル基、置換シリル基等であるN, N', N"-トリ置換イソシアヌル酸を加水分解することにより、N, N', N"-トリヒドロキシイソシアヌル酸を生成できる。

#### 【0035】

反応終了後、反応生成物は、例えば、濾過、濃縮、蒸留、抽出、晶析、再結晶、カラム

クロマトグラフィーなどの分離手段や、これらを組み合わせた分離手段により分離精製できる。

### 【実施例】

#### 【0036】

以下に、実施例に基づいて本発明をより詳細に説明するが、本発明はこれらの実施例により限定されるものではない。

#### 【0037】

##### 製造例1

###### N-ベンジルオキシカルバミン酸フェニルの製造

フラスコに、O-ベンジルヒドロキシリルアミン塩酸塩3.19g(20mmol)、ピリジン3.16g(40mmol)、アセトニトリル40mlを加え、窒素雰囲気下、0℃で攪拌した。滴下ロートからクロロギ酸フェニル3.13g(20mmol)を、反応液温度を0~2℃に保ちながら滴下した後、25℃で2時間攪拌した。得られた反応混合物を濃縮し、酢酸エチル50mlを加え、沈殿物を濾過した後、沈殿物を酢酸エチル30mlで洗浄した。濾液を、0.5N塩酸水溶液40ml、水20ml、飽和食塩水20mlで順次洗浄した。有機層を硫酸マグネシウムで乾燥し、濃縮後、さらに真空ポンプで溶媒を除去した。残渣にヘキサン20mlを加え、粉碎した後濾過し、ヘキサン10mlで洗浄した後、吸引乾燥を1時間行った。次いで、減圧下、80℃で12時間加熱乾燥することにより、N-ベンジルオキシカルバミン酸フェニルの微黄色結晶を、4.56g(収率94%)得た。

###### [N-ベンジルオキシカルバミン酸フェニルのスペクトルデータ]

<sup>1</sup>H-NMR(CDCl<sub>3</sub>, 500MHz) d: 4.96(s, 2H, CH<sub>2</sub>), 7.10-7.16(m, 2H, ArH), 7.20-7.26(m, 1H, ArH), 7.32-7.46(m, 7H, ArH), 7.63(brs, 1H, NH)

<sup>13</sup>C-NMR(DMSO-d<sub>6</sub>, 125MHz) d: 155.3, 150.3, 135.1, 129.4, 129.3, 128.8, 128.6, 125.8, 121.3, 78.8

#### 【0038】

##### 実施例1

O-ベンジルヒドロキシリルアミン塩酸塩1.60g(10mmol)、ピリジン1.58g(20mmol)、アセトニトリル20mlを加え、窒素雰囲気下、0℃で攪拌した。クロロギ酸フェニル1.57g(10mmol)を、反応液温度を0~2℃に保ちながら滴下した後、25℃で2時間攪拌した。得られた反応混合物を濃縮し、酢酸エチルを加え、沈殿物を濾過した後、N-ベンジルオキシカルバミン酸フェニルを含む濾液を濃縮した。得られた濃縮残渣に、4-ジメチルアミノピリジン(DMAP)1.22g(10mmol)を加え、120℃のバスで20分間加熱した。冷却後、メタノールを10ml加え、30分間攪拌した。沈殿物を濾過し、メタノール10mlで洗浄した後、吸引乾燥を1時間行った。次いで、減圧下、80℃で12時間加熱乾燥することにより、N, N', N"-トリス(ベンジルオキシ)イソシアヌル酸の白色結晶を、1.22g(収率82%)得た。

###### [N, N', N"-トリス(ベンジルオキシ)イソシアヌル酸のスペクトルデータ]

<sup>1</sup>H-NMR(DMSO-d<sub>6</sub>, 500MHz) d: 5.11(s, 6H, CH<sub>2</sub>), 7.4-7.5(m, 9H, ArH), 7.5-7.6(m, 6H, ArH)

<sup>13</sup>C-NMR(DMSO-d<sub>6</sub>, 125MHz) d: 145.0, 133.6, 129.7, 129.2, 128.5, 78.6

#### 【0039】

##### 実施例2

冷却管、温度計、滴下ロートを備えた500mlの4つ口フラスコに、O-ベンジルヒドロキシリルアミン塩酸塩16.0g(100mmol)、ピリジン15.8g(20mmol)、アセトニトリル200mlを加え、窒素雰囲気下、0℃で攪拌した。滴下ロートからクロロギ酸フェニル15.7g(100mmol)を、反応液温度を0~2℃に保ちながら滴下した後、氷浴を外して2時間攪拌した。得られた反応混合物を濃縮し、酢酸エチル500mlを加え、沈殿物を濾過した。沈殿物を酢酸エチル300mlで洗浄した後

、N-ベンジルオキシカルバミン酸フェニルを含む濾液を濃縮した。得られた濃縮残渣に、4-ジメチルアミノピリジン(DMAP) 12.2 g (100 mmol) を加え、90℃のバスにつけ攪拌した。反応温度がピークに達した時点(96℃)でバス温度を120℃に上昇し、トータルで20分間加熱した。冷却後、メタノールを100 ml 加え、20分間攪拌した。沈殿物を濾過し、メタノール100 mlで洗浄した後、吸引乾燥を1時間行った。次いで、減圧下、80℃で12時間加熱乾燥することにより、N, N', N''-トリス(ベンジルオキシ)イソシアヌル酸の白色結晶を、11.2 g (収率75%) 得た。

#### 【0040】

##### 実施例3

製造例1で得られたN-ベンジルオキシカルバミン酸フェニル1.22 g (5 mmol) に、4-ジメチルアミノピリジン(DMAP) 0.61 g (5 mmol) を加え、120℃のバスで20分間加熱した。冷却後、メタノール6 mlを加え、20分間攪拌した。沈殿物を濾過し、メタノール6 mlで洗浄した後、吸引乾燥を1時間行った。次いで、減圧下、80℃で12時間加熱乾燥することにより、N, N', N''-トリス(ベンジルオキシ)イソシアヌル酸の白色結晶を、0.61 g (収率81%) 得た。

#### 【0041】

##### 実施例4

実施例1において、塩基としてDMAPの代わりにトリエチルアミン(TEA) 10 mmolを用いた点以外は実施例1と同様の操作を行い、N, N', N''-トリス(ベンジルオキシ)イソシアヌル酸の白色結晶を、1.04 g (収率70%) 得た。

#### 【0042】

##### 実施例5

実施例1において、塩基としてDMAPの代わりにトリエチレンジアミン(TEDA) 10 mmolを用いた点以外は実施例1と同様の操作を行い、N, N', N''-トリス(ベンジルオキシ)イソシアヌル酸の白色結晶を、0.67 g (収率45%) 得た。

#### 【0043】

##### 実施例6

実施例1において、塩基としてDMAPの代わりにイミダゾール10 mmolを用いた点以外は実施例1と同様の操作を行い、N, N', N''-トリス(ベンジルオキシ)イソシアヌル酸の白色結晶を、0.63 g (収率42%) 得た。

#### 【0044】

##### 実施例7

実施例1において、塩基としてDMAPの代わりにルチジン10 mmolを用いた点以外は実施例1と同様の操作を行い、N, N', N''-トリス(ベンジルオキシ)イソシアヌル酸の白色結晶を、0.46 g (収率31%) 得た。

#### 【0045】

##### 実施例8

実施例1において、塩基としてDMAPの代わりに1,8-ジアザビシクロ[5.4.0]-7-ウンデセン(DBU) 10 mmolを加え、120℃の代わりに90℃で30分加熱した点以外は実施例1と同様の操作を行い、N, N', N''-トリス(ベンジルオキシ)イソシアヌル酸の白色結晶を、0.42 g (収率28%) 得た。

#### 【0046】

##### 実施例9

実施例1において、塩基としてのDMAPを15 mmol用いた点以外は実施例1と同様の操作を行い、N, N', N''-トリス(ベンジルオキシ)イソシアヌル酸の白色結晶を、0.94 g (収率63%) 得た。

#### 【0047】

##### 実施例10

実施例1において、塩基としてのDMAPを5 mmol用いた点以外は実施例1と同様

の操作を行い、N, N', N''-トリス(ベンジルオキシ)イソシアヌル酸の白色結晶を、0.65g(収率44%)得た。

【0048】

実施例11

実施例1において、120℃の代わりに140℃で10分加熱した点以外は実施例1と同様の操作を行い、N, N', N''-トリス(ベンジルオキシ)イソシアヌル酸の白色結晶を、0.99g(収率66%)得た。

【0049】

実施例12

実施例1において、120℃の代わりに90℃で30分加熱した点以外は実施例1と同様の操作を行い、N, N', N''-トリス(ベンジルオキシ)イソシアヌル酸の白色結晶を、0.99g(収率66%)得た。

【0050】

実施例13

実施例1において、120℃の代わりに160℃で加熱した点以外は実施例1と同様の操作を行い、N, N', N''-トリス(ベンジルオキシ)イソシアヌル酸の白色結晶を、0.34g(収率23%)得た。

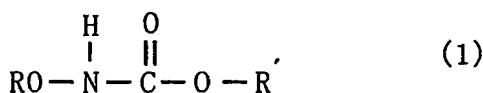
【書類名】要約書

【要約】

【課題】 N, N', N'' - トリ置換イソシアヌル酸を簡便に高い収率で製造する方法を提供する。

【解決手段】 本発明のN, N', N'' - トリ置換イソシアヌル酸の製造方法は、下記式(1)

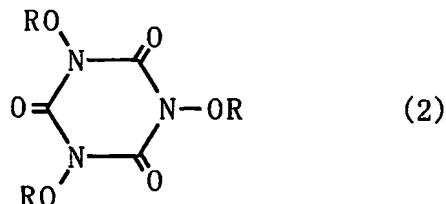
【化1】



(式中、Rはヒドロキシル基の保護基を示し、R'は炭化水素基又は隣接する酸素原子との結合部位に炭素原子を有する複素環式基を示す)

で表されるN-置換カルバミン酸エステルを加熱して、下記式(2)

【化2】



(式中、Rは前記に同じ)

で表されるN, N', N'' - トリ置換イソシアヌル酸を生成させることを特徴とする。

【選択図】 なし

特願 2003-316546

出願人履歴情報

識別番号

[000002901]

1. 変更年月日  
[変更理由]  
住 所  
氏 名

1990年 8月28日  
新規登録  
大阪府堺市鉄砲町1番地  
ダイセル化学工業株式会社